

岡豊高校の現状 芸術コース存続の危機

山本哲也

八月の後半より、本校ではやっと屋上の防水工事が始まりました。今年一年生のホームから雨漏りがするという連絡が入り、実態は雨が降ると二か所から雨漏りがし、その下にバケツを置いて、そのスペースを空けて授業をしている状態です。これでは集中できず、事務長が県に要請し、やっと工事が入った状態です。なぜ今まで放置されていたのか、県ももっと早急な対応をしてほしいものです。ところが、工事のスピード以上に雨が多く、今は南北の校舎の四階では、いたるところで雨漏りが続き、先日は天井の板が一枚抜け落ちていました。ここに至り、台風も来て、屋上のシートが飛んだり天井からの雨漏りが広がるなど、早期の完成が待たれています。岡豊高校は、普通科(一年七クラス、二・三年八クラス)の計二十三クラス、生徒数八

八六名)の学校で、一年次より七クラスの中に、体育コースと芸術コースがそれぞれ一クラスずつあります。ただこの二年、特に芸術コース(音・美・書)の生徒が二〇名程度と少なくなってきたおり、その中でも書道コースは、一年一名、二年一名、三年ゼロという状態です。このままではコース存続の危機が心配されます。中学生がいきなり一年次よりコースを選択するのは無理なのではないか、特に中学校に科目として音楽と美術は存在する中で、書道は中学において書写の位置づけで、

それも音楽と美術と比べると十分な対応がされていない状態です。そんな中で、書道コースを選ぶというには困難さを感じます。また音楽コースも、丸の内高校に音楽科があり両方とも定数に達していない中で、一つに統合される可能性もあります。そこで音楽や書道では、以前の二年次よりのコース選択制の方法もあるのではないかと、現在の生徒の状況を考えながら、岡豊高校にとって有意義な方向性を検討していくことが必要です。

難しいものもあり、あえて書かせる必要があるとは思えません。高教組では県教組とともに、ねらいや使途などを名簿記載者に伝えていらぬ不安を払拭することや、来年度以降レポートを実施しないことなどを県教委に申し入れました。

ついに採用前研修?!

高教組委員長 竹島久美

九月三十日に平成二十九年度の教員採用審査の第一回目(名簿登録者の発表)があり、採用制度も少し改善もされたいという要求が芽生えました。「幅多ゼミナール館」を会場に、地域探究サークル・幅多「もやい塾」が生まれました。2008年度は、月2回の事務局会を開き、6回の例会を開きました。「花見と歌声」(4月)、「韓国・済州島探究」(6月)、「沖ノ島遊学」(9月)、「芸術と郷土料理」(10月)、「昔遊び・新年会」(1月)、「有機農業と土づくり」(3月)など地域でがんばる人たちを訪ね、幅多学を実践しました。「もやい塾」は、主に退職教職員が事務局を運営する「サロン」です。少しばかりのストレスを刺激に、楽しかったという達成感をえて、持続していますが、歳とともに行動範囲は狭まってきています。しかし、地域の移住者と交流し始めたことがきっかけで、「もじゃもじゃ会」という移住者サークルが誕生しました。この会は、幅多ゼミナール館を月1回のペースで活用しはじめ、30人程の圧倒的に若い人たちが集まってきました。地域・仕事などの話し合い・支えあいが中心でよく何か作っては食べたりして楽しそうです。来年は田んぼを借りて共同でお米作りに挑戦するそうです。私達夫婦も時々お酒を持って行って混ざらせてもらっています。

また、採用前研修を行うと同時に採用前の自己研修のために受講することのできる研修や教材の案内がされています。採用前研修について、「積極的に参加してください」と参加は任意の理由ですが、不参加の場合には理由を書く欄があります。実施日と場所が高知市周辺という以外は、内容も、欠席した場合どうなるかなどの説明も書かれておらず、あまりにも不親切です。県教委に確認したところ、もちろん旅費の支給も何かあったときの補償もないとのこと。押し付けられた研修が増え、他の仕事を圧迫し、多忙化に拍車をかけていますが、形式的で、これだけやられたという事実が大事なのではないかとと思われるような研修も多くあります。このレポートや研修についても、必要性や内容について、しっかり吟味されたのでしょうか。

「足元からの探求」

のニーズに応える講座となりました。津野幸右さんの「海や山の土

佐民俗学」、宮川敏彦さんの「土佐備長炭づくり」の話は具体的で注目されました。

2010年度事業でこの間の地域学を地域ニーズに沿って取り組みと課題を提案する「幅多学事始」一高知県の西部「波多」を楽しむ本一をP127にまとめ出版しました。

また、県内外大学生と幅多地域社会人との体験実習講座開催を広げていくなかで、高知短期大学の「高知学」(幅多のグリーンツーリズム)が2008年度に続き2009年1月に、2単位取得可能な講義・体験実習として20名の学生で実施されました。

幅多「もやい塾」

幅多の地域学の機会を準備するなかで、もっと自由に気軽にフィールドワーク中心に作りたという要求が芽生えました。

「幅多ゼミナール館」を会場に、地域探究サークル・幅多「もやい塾」が生まれました。2008年度は、月2回の事務局会を開き、6回の例会を開きました。「花見と歌声」

(4月)、「韓国・済州島探究」(6月)、「沖ノ島遊学」(9月)、「芸術と郷土料理」(10月)、「昔遊び・新年会」(1月)、「有機農業と土づくり」(3月)など地域でがんばる人たちを訪ね、幅多学を実践しました。「もやい塾」は、主に退職教職員が事務局を運営する「サロン」です。少しばかりのストレスを刺激に、楽しかったという達成感をえて、持続していますが、歳とともに行動範囲は狭まってきています。しかし、地域の移住者と交流し始めたことがきっかけで、「もじゃもじゃ会」という移住者サークルが誕生しました。この会は、幅多ゼミナール館を月1回のペースで活用しはじめ、30人程の圧倒的に若い人たちが集まってきました。地域・仕事などの話し合い・支えあいが中心でよく何か作っては食べたりして楽しそうです。来年は田んぼを借りて共同でお米作りに挑戦するそうです。私達夫婦も時々お酒を持って行って混ざらせてもらっています。

地域学

山下正寿

幅多地域は、香川県より面積が広く、「人材の里」と呼ばれた歴史がありながら、大学がありません。

高校教員時代から、大学のないために高校生の進路選択が狭まり、知的交流の機会が少ないことを感じていました。「幅多に大学をつくる会」を市民レベルでつくりアピールしてきましたが、橋本知事の3期目に選挙公約となり、当選後、県私学支援課の協力で、幅多の大学教育機会づくりとして、「幅多アカデミー」の活動が2年間行われました。大学との連携とともに、地域づくり、NPO活動など学習意欲の高い人たちの学びあいの場づくりとなりました。

「幅多アカデミー」

開校は2004年12月4日、大方商業高校で「地域づくりと住民自治」、2回は大月町農村環境改善センターで「海を活かした地域づくり」、3回は、西土佐村・四万十楽舎で「森と木を活かした地域づくり」でした。それぞれ2日間で、1日目は大学の研究者の講義と地域づくりリーダーとのシンポジウム、2日目は、「黒潮実感センター」「黒潮生物研究所」「四万十楽舎」などのスタッフの協力をえて、各地のフィールドワークを実施しました。2年度は「幅多地域大学を考える」「四万十の生きもの」「地域の文化を活かす」をテーマで開催しました。

「幅多学講座」

2009年から2年度にわたり「トヨタ財団助成事業」をうけて「幅多学講座」・シンポジウムを開設しました。「幅多の価値を住民自身が現場の知恵をもちより学び、高める」ことを基本として地域講師のネットワークにとりくみました。「幅多学」は地域の歴史・文化・自然などを軸とし、地域